

未来の学びを設計する

ハイブリッド型授業デザインのための実践的ガイド

なぜ今、教育の変革が不可欠なのか？

「子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く。」

- キャシー・デビッドソン（ニューヨーク市立大学大学院センター教授）

社会はDX（デジタルトランスフォーメーション）とグローバル化の進展により、めまぐるしく変化しています。この変化は、労働の質を高度化させ、私たちの生活、仕事、教育のあらゆる側面に影響を及ぼします。未来の創り手となるために必要な資質・能力を、子供たちが確実に備えるための学校教育の実現が急務となっています。



新時代に求められる「新たな学び」：アクティブ・ラーニングの3本柱

学習指導要領の改訂で中核となったのが「アクティブ・ラーニング」です。これは3つの「新たな学び」で構成されます。



① 深い学び (Deep Learning)

習得・活用・探究というプロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた学びが実現できているか。



② 対話的な学び (Interactive Learning)

他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める対話的な学びが実現できているか。



③ 主体的な学び (Proactive Learning)

見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びが実現できているか。

これらの「新たな学び」を実現するために、ICTの効果的な活用が不可欠です。

コロナ禍が加速させた教育のパラダイムシフト

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、教育のデジタルトランスフォーメーションを加速させる決定的な転換点となりました。

Before コロナ

遠隔教育の位置づけ:

非日常



目的: イベント的、通常授業では
できない特別な体験

With/After コロナ

遠隔教育の位置づけ:

日常



目的: ホームルーム、授業配信、協働学
習など、日々の学習活動の継続

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、教育のデジタルトランスフォーメーションは、GIGAスクール構想の実現も追い風となり、緊急時においても学びを保障する環境整備が国家的な課題となりました。

遠隔授業の制度的基盤：大学設置基準の変遷

遠隔授業は、近年の技術革新以前から、文部科学省による規制緩和を通じて段階的に制度化されてきました。

- **1997年** 大学審議会答申により、卒業要件124単位中、**30単位**まで遠隔授業での修得が可能に。
- **1998年** 大学設置基準が改正され、上限が**60単位**へと拡大。
- **2001年** 授業形式の規制を大幅に緩和。「同時かつ双方向」でなくとも、一定の条件を満たせば遠隔授業として認定可能に。e-Learning等が認められる。
- **2003年** 校舎及び附属施設以外の場所での授業実施が提案される。

2001年改正の核心：非同期型（オンデマンド型）学習の解禁

平成13年の文部科学省告示第51号は、遠隔授業の定義を大きく広げました。

ポイント1：従来の要件

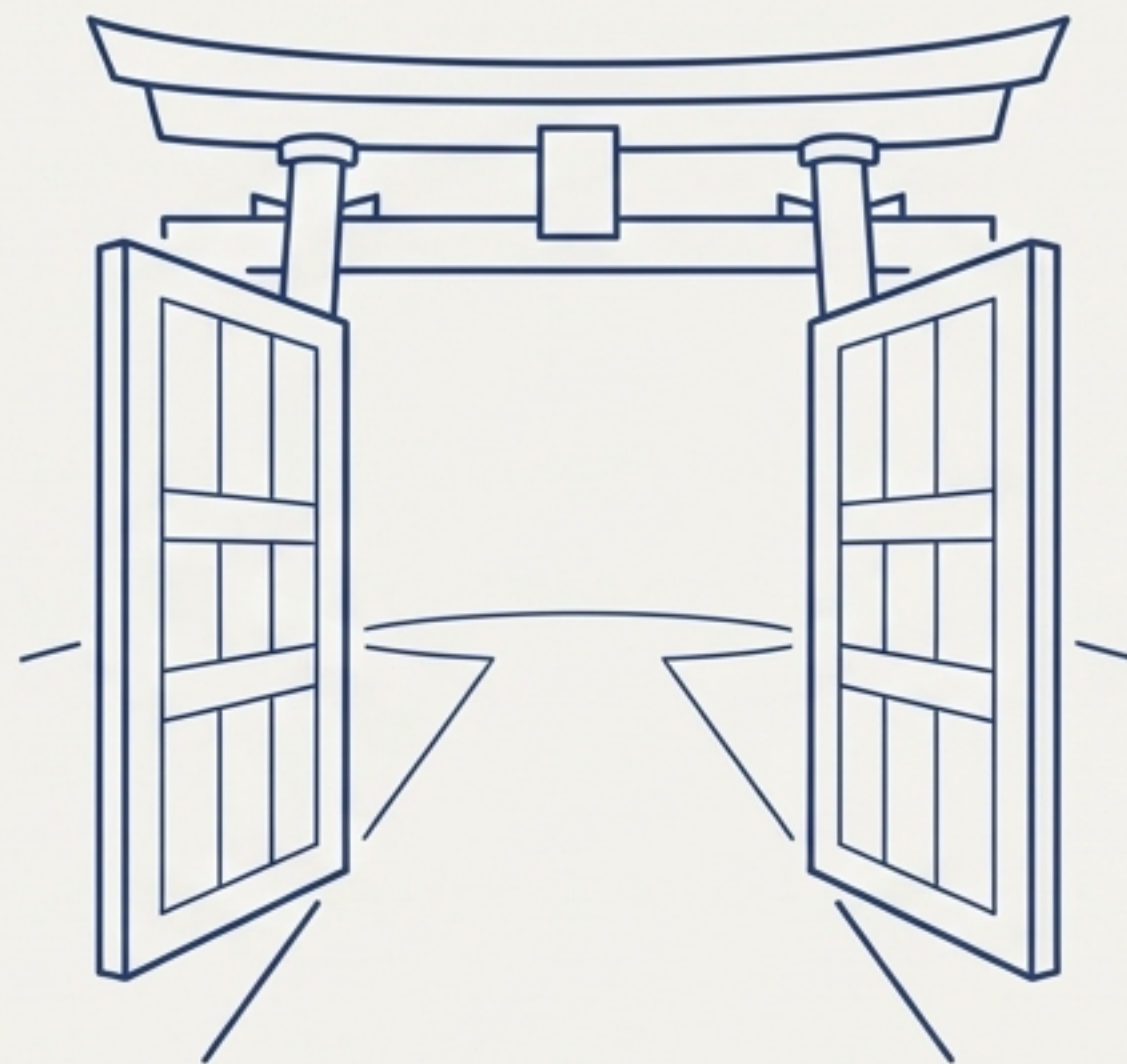
「同時かつ双方向に行われるもの」（例：テレビ会議システム）

ポイント2：追加された要件

「同時かつ双方向に行われない場合であっても、一定の条件を満たしていれば、これを遠隔授業として行うことが可能」

その「一定の条件」とは

-  **指導の実施**
毎回の授業で、設問解答、添削指導、質疑応答等による指導を併せ行うこと。（メール、FAX等も含む）
-  **意見交換の機会**
学生の意見交換の機会が確保されていること。（例：掲示板の設置）



この改正が、現在の多様なe-Learningやオンデマンド型授業の基盤となっています。

現代のハイブリッド型授業：3つの基本パターン

オンライン授業と対面授業を組み合わせるハイブリッド型授業には、主に3つのパターンがあります。それぞれの特性を理解し、目的に応じて最適な形式を選択することが重要です。



ハイフレックス型 (HyFlex Model)

学生が対面かオンラインかを都度選択できる柔軟な形式。



ブレンド型 (Blended Model)

授業の目的ごとに、対面回とオンライン回を計画的に組み合わせる形式。



分散型 (Distributed Model)

受講生をグループ分けし、対面とオンラインを交代で受講させる形式。

各パターンのメリット・デメリット比較

モデル	主な特徴	メリット	デメリット
ハイフレックス型 (HyFlex)	学生が状況に応じて対面/オンラインを選択可能。	・学生の選択肢が広い。 ・フルオンラインへの移行が容易。	・教室環境の設営が大変。 ・教員の負荷が高い（対面とオンライン両方に配慮）。
ブレンド型 (Blended)	授業目的（例：初回、グループワーク回など）に応じて対面とオンラインを組み合わせる。反転授業もこの一種。	・各回の目的に合わせるため教育効果が高い。 ・対面/オンライン両方の反応を確認できる。	・全員参加の対面回のため、広い教室が必要。 ・オンラインのみの学生には同じ効果は見込めない。
分散型 (Distributed)	受講生をグループ分けし、対面とオンラインを交互に実施。	・人数制限が必要な対面授業（実験・実習など）を実施可能。	・両方の準備が必要で教員の負荷が非常に高い。 ・コースデザインが複雑になる。

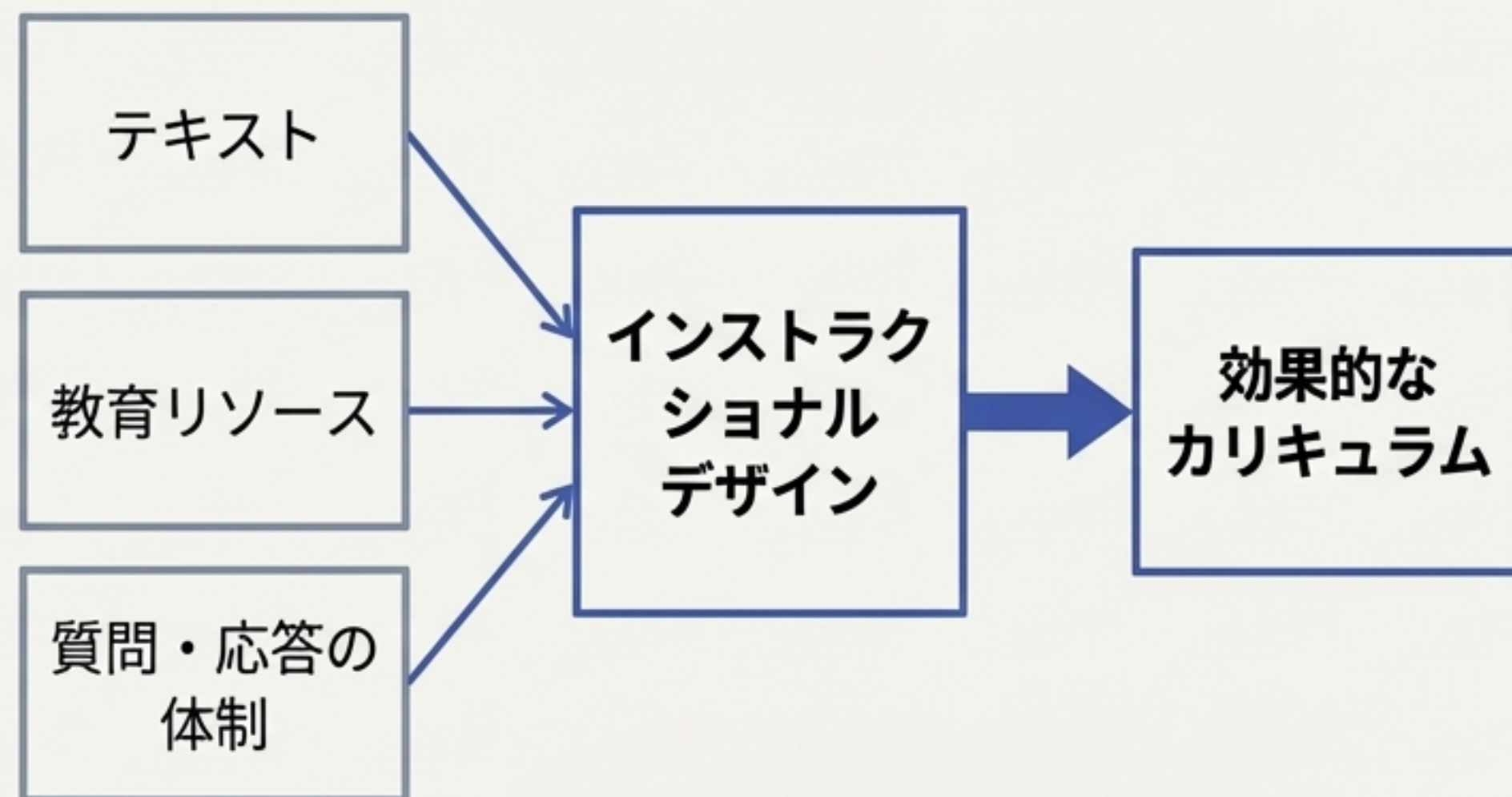
優れた授業への設計図：「インストラクショナルデザイン」という方法論

カリキュラムとは？

「何を」「どのように」教えるかという授業の内容そのもの。

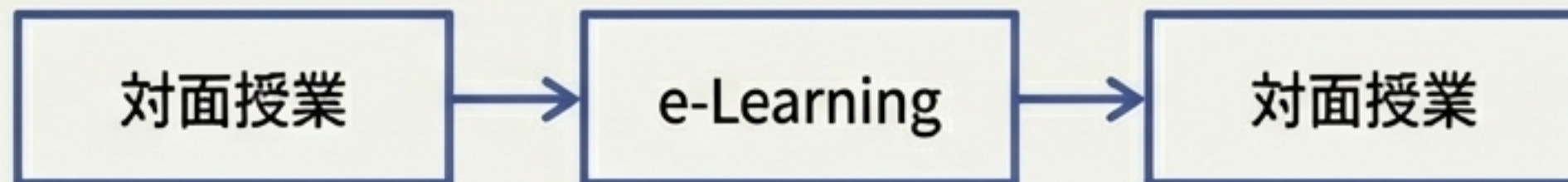
インストラクショナルデザインとは？

そのカリキュラムを構築するための**方法論**。学習者の特徴、環境、教育リソースを考慮し、**最も効果的・効率的・魅力的な教育方法を選択し、実行と評価を繰り返すプロセス**。



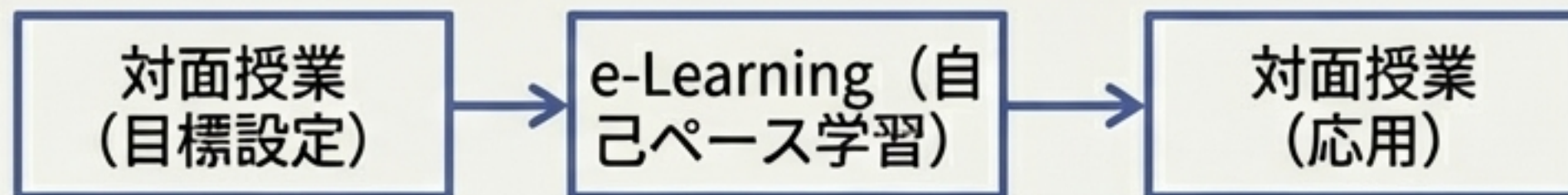
ハイブリッド型授業デザイン：3つの実践モデル

I型：交互モデル（理論の応用）



e-Learningで理論を学び、対面でグループ討議やワークショップを行う。課題意識を持って対面授業に臨むことで、問題解決能力を育成する。

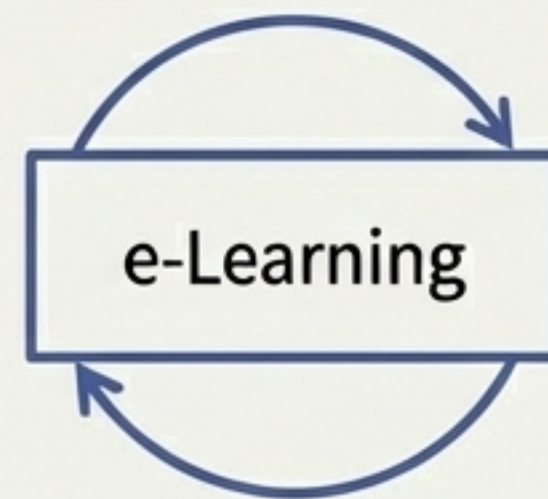
II型：基盤モデル（知識の定着）



最初の対面で目標を明確化し、e-Learningで自分のペースで繰り返し学習。知識の定着と理解を深める。

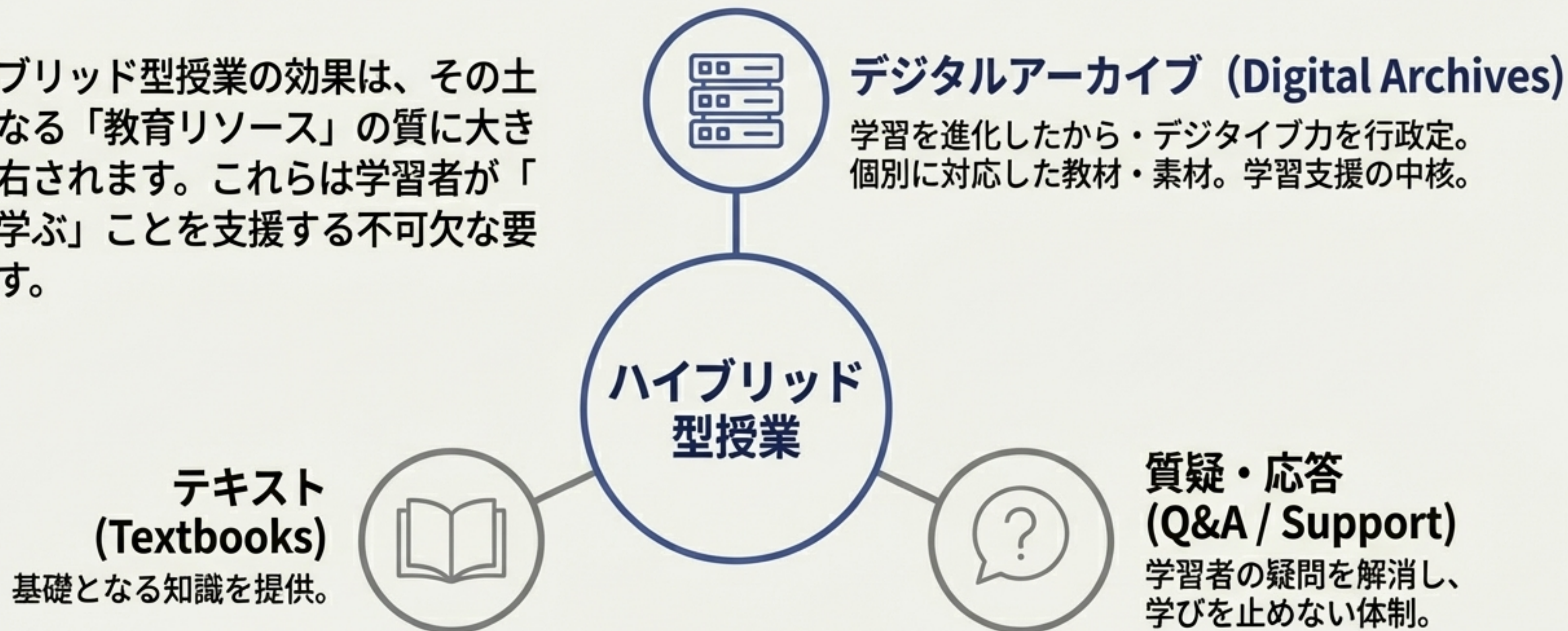
III型：自己完結モデル（生涯学習）

「いつでも、どこからでも」学べる完成形。
学び続ける学習者のための発展的な学習方法。



全てのモデルを駆動させる力：教育リソースの重要性

ハイブリッド型授業の効果は、その土台となる「教育リソース」の質に大きく左右されます。これらは学習者が「自ら学ぶ」ことを支援する不可欠な要素です。



講座の目的は「教えること」ではなく、学習者の行動変容を促すこと。
そのために、質の高いリソースの整備と蓄積が鍵となります。

次の地平へ：遠隔協働学習の可能性

定義

遠隔協働学習とは、コンピュータ通信などを利用して、学校間あるいは学級間で情報交換をしながら、共同で学習活動を進めていく形態です。

学びの対象の広がり

交流の対象は他校に限りません。校内の異学年、地域人材、専門家など、子供たちの目に「他者」と映るすべての人々が学習の対象となり得ます。

遠隔協働学習でできることの例

- 全国一斉に同じ植物の種を蒔き、その成長をデータベースで比較する。
- 一つの川の上流・中流・下流で水質や生物を調査し、Webページで比較する。
- 日本中の小学校で南中時刻を観測し、リアルタイムで比較・交流する。



なぜ遠隔「協働」学習が重要なのか？

稲垣(2002)らの研究では、遠隔協働学習のメリットが以下のように整理されています。



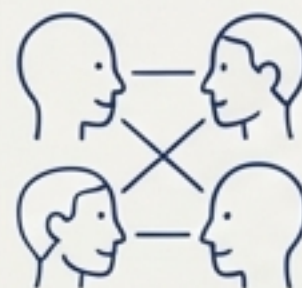
地球規模での異文化接触を体験し、世界に開かれた学習ができる。



学校内だけでは得られない一次情報を収集できる。



多面的な情報を分析し、調査する思考力を養うことができる。



多様性に富んだ意見に触れ、教室外の人々とのコミュニケーションを経験できる。



学習者にとって魅力的であり、高い意欲を持って取り組むことができる。

最高の学びは「他者」との交流から生まれる

遠隔協働学習の最も深い価値は、単なる情報交換に留まりません。

「自分たちの知識のわかりなおし」

(堀田, 1996)



1. 伝えるために

自分たちの活動や地域の文化を、相手にわかるように編集し直す。



2. 比較することで

他の地域との違いから、自分たちの地域の良さや特徴を再発見する。



3. フィードバックから

相手からの反応を通じて、自分たちの取り組みを客観視する。

メディアの向こうに「本物の他者」が存在すること。それが、学びの必然性を生み出し、学習者が自らの知識を内省し、より深く理解する最も強力な動機付けとなるのです。